

辻荘一文庫（ 7 ）

Hovland, Egil(1924~):Gloria (MC1/H846/2)

Hovland は、オスロ・コンセルヴァトワールでオルガンを学び、作曲はコーブランドやダラピッコラに師事しています。後期ロマン派のナショナリズムの濃厚な作風から出発しますが、1950年代にはストラヴィンスキー、バルトークらの影響を受け、新古典派の技法でルター派教会音楽を作曲していきます。後に12音技法を通り、ダルムシュタット楽派から電子音楽、アレアトリーの影響を受ける中で、Lamenti, Magnificatなどを作曲します。

80年代、90年代になると圧倒的に宗教作品が多くなり、教会暦に従って100曲以上のイムヌス、60曲のモテットなどがあり、教会音楽作曲家としてノルウェーでは最も傑出した作曲家といえるようです。この作品はニューグローヴ音楽辞典のselectiv listに載っていませんので代表作ではないのかもしれませんが、混声合唱と金管楽器（トランペット3、トロンボーン2、チューバ）の編成で、ノルウェー語によるグローリアです。冒頭は司祭が歌う先唱句Gloria in excelsis Deoですが、グレゴリオ聖歌の旋律にノルウェー語がついています。序文がノルウェー語なので読めませんが、教会音楽祭のような機会のために作曲されたようです。初演が1962年10月31日となっています。

ところでこのHovlandの楽譜は以前にも辻家から寄贈を受けており（ノルウェー語による宗教合唱曲Et Norsk Te Deum）そちらの初演が同じく1962年10月30日なのです。やはり何かの催しで連日演奏されたこととなります。このことからノルウェー音楽界における彼の重要性が伺えます。

1960年代の初めは、彼がダルムシュタットからの影響を作品に反映させ始めた頃です。当時のヨーロッパにおいては最先端の語法により、ルター派教会音楽作品を生み続けた貴重な作曲家といえます。

Pizzetti, Iidebrando(1880-1968) Messa di Requiem (MC1/N669/1)

彼は20世紀初頭のイタリアで最も影響力のあったイタリア音楽界の重鎮。作曲家、指揮者、批評家でもあります。彼は大規模な舞台作品などで注目を集めていますが、Attolite portas, Adjuro vosなどの宗教声楽曲も多く、注目すべき作曲家です。このレクイエムはper sole vociとありますのでア・カペラの重唱のようです。冒頭のRequiem aeternamにグレゴリ

才聖歌の旋律を持ってくる作曲家が多いですが、彼はそれをしていません。現代的旋律による全くの自由対位法です。Kyrie のあと Dies irae になります。ここでははっきりとグレゴリオ聖歌の旋律をベースにし、それ以外の声部は Oh! という感嘆符のメリスマのみで書かれ、審判の恐怖を表現しています。さらに 12 声の Sanctus, Agnus Dei, Libera me、と続きます。

2010.11.13 杉本 ゆり 記